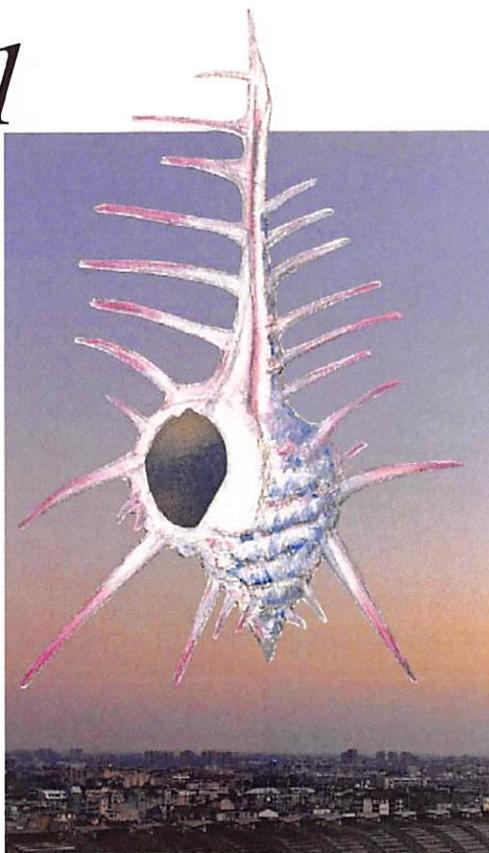


# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2020.11



令和2年11月1日発行(毎月1回1日発行)第68巻第11号

No.750

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものと同化してきました大きな力。——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地 中 海

二〇一〇年一一月号（通巻七五〇号）

香川進の生きものの歌 25

田土成彦 69

私と短歌との出会い (219)

八田曉美 17

◇今月の二十首詠……明けの明星

高津砂千子 2

■作品[A]

松永智子・松浦禎子他 4

町田龍子他 22

松井千明他 58

A C B A

間野春美他 70

国原喜美子他 84

■オリーブ集

藤野喜美子・本多キミ子 48

柄目けい子・中江京子 14

◇今月の二人

三好聖三 18

■高尾恭子歌集「裸足のステップ」批評  
歌の吐息ひめつ  
現在を駆けゆく女

西堤啓子

■コロナ禍の中で働く現場から

今月の二人・作品評

コロナウイルス騒動顛末記——病院の場合—— 滝田靖子

百貨店とエッセンシャルワーク

コロナ禍と子どもたち

阿藤たつる

クリップ……100

神田通信……表3

◇シルクロード・カフェ——【責任編集】

木村文子 54

遊覧香港

〈私の来た道・うたの道〉 金光昭子 56

■歌壇月旦

「てにをは」に注目 檜垣美保子

■九月号作品批評

A……牧 雄彦・菊地栄子

B……奥田陽子・筆谷幸子

C……山野幸司・田中純子

オリーブ集……国原喜美子

久我田鶴子 76

檜垣美保子 77

76

75

今月の二人・作品評

最近の歌誌より

（編集部）

75

16

## 明けの明星

高津砂千子

盆暮もなく週三一日透析を受くる身となり六年経ちぬ

健診で異常のなきは前年まで ストレスなるや突如意識が

電話に出ぬをいぶかりて即高速を駆けて来たりし子に救わるる

もう三時間遅ければ死と宣えり四日目に醒めしわれに向かいて

カリウム値9.6で生きているわれを奇跡と医師のおどろき

探しでも出口わからぬくらやみにひかりひとすじ 万葉の師の

入院のひと月半終え一直線息子夫婦の家に落ちつく

琴線に触ることばを書き留めしノートたずさえ病院通い

昭和二十年生まれ。  
昭和五十一年「地中海」入社。

紅風グループ長。

## 骨密度　水分検査　CTと誕生月の検査組まる

五時間余ベッドで過ごす透析はあしたにつなぐ命なりけり  
透析の調理実習月一度親しきひとに会える日が来る

登山せし大雪山の紺碧の空おもいだす倦みたるときは

思おえはふたむかし前の子宮ガン手術断り漢方で治しき

七転び八起きはまこと子の家に移りて出合いし音訳の界

パソコンに記事を吹き込み校正す空氣緊れる録音室に

音訳のボランティアする回重ねおのれの無知に気付ける多し

去年の秋友と登りし安芸あきのこ小富士　車窓より見る朝に夕べに

またたける明けの明星ふり仰ぎウォークイングの一歩踏み出す

あさまだき誰にも会わぬ道をゆくチチチチと啼く小鳥はいすこ  
みずみずしき朝顔の青かぞえゆく恙無き日であれかし今日も

# 作品 A

松 永 智 子

あかり

・嵐

三 浦 好 博

居眠り

・銚

夏終る予兆なるごと鳴きたつる蟬の声ふる木の下を過ぐ  
ものの音人の声のすでになく休日の夜のふけゆくはやし  
音のなくたなはる間その底に小さきあかりともしもの書く  
ひとりして祝ぐ九十一歳音のなく衢に夜のふけてゆくなり  
泪ため訴へし日の一途なる少年はいま七十歳とふ  
高原の町に牛飼ひ梨ぶだう育てるといふ声はづみつ  
わが生れし九月三日の夜のふけちちははに告げひとり酒酌む

松 浦 稔 子

令和元年

・羊

この秋の台風のがれしふるさとの安堵の刈田慈しむなり

家を捨てし三十年を思いみる櫻大樹の並木をゆくに

足元の墓地の細道うねりゆく小蛇も吉と十三回忌

大あらし昨夜に去りたる幸いも身内の無事も祈りにこめて

跡かたもなく亡くなりし人々のまぼろしたんぼのその向うまで

うたうよう経上みよと諭されし声を背にしてふるさとを去る  
祖々の墓石よりも一段高く建つ日支の変に斃れたる義父

焼け跡の菜園の肥料と道に積む馬糞を拾ひし夏の日あり  
アイスキャンディ買へば歩調の早くなる老いの心の童にもどり  
緑なきを淋しみ川辺に紅木槿ゑしが咲きて涼しかるらむ  
屋根を打つ雷雨の響き高まりて猛暑二十日の終止符と聴く  
この暑さ今週かぎりと予報せし気象士のかほ勝負師に見ゆ  
黄枯れて古木と化せるトマト抜く毎朝の完熟樂しみなりし  
余り土に初めて植ゑしズッキーニ実の形よく味も又よし

宮 本 靖 彦

気象士

・凌

建ち並ぶマンション群を通り抜け人影のなき午後の道ゆく  
白じろと伸びたる一本道とほし老人ホームはかなたに見えつ  
車いす並べておやつのプリン食む老いの人たちの黙ふかかりき  
白髪の増えたる友の車椅子押して廊下を行きては戻る  
聰明なりし友の頭脳は壊れしか何か言へども言葉にならず  
帰りゆくわれを見つめて車いす動かさず小さく手を振る友は  
にこにことただ笑ひるし友の顔艶よきことを時経ておもふ

牧 雄 彦

時経ておもふ

・大

## 三 好 聖 三

雑品庫

・伊

もとむらしげと

意思を汲む

・そ

わが胸をしとねとなして眠りいる卯月生れの四匹の猫  
日陰にて塩分含みの水を飲むオクラの花が匂う八月

その爺は煙に眺めていたらしい鋤一挺を胸に置きつ  
家・畑 細き往復ときとして猫と転がる秋 朝の路地

アンニュイの捨て場所としての映画館日がな過ごせば仄しさの湧く  
赤ウインナ・魚肉ソーセージの一品目、妻子に固く拒否をされおり  
田舎者・叩き上げという特価品、笊に縛めく打算の果実

## 御代田澄江

樹木も古りぬ

・茨

降り立てばさ庭に桔梗擬宝珠咲き蜜柑も青実小粒なれども  
白樺の古りてぞ蟻の巣となりぬ樹木も古りぬ 我も古りたり  
植ゑし木も自生の樹々も許すべし根から伐りたり切りつめにけり  
こころに切りつめし庭の百日紅秋立つ日にも咲く氣配無く  
弟の賜ひし梔子初花の高き香氣のあたりを払ふ  
三年目の初花一茎手折り来て亡夫に供へぬ弟からです  
水遣りの朝の五時半帽子には柊一葉付きて来にけり

## 茂木斌

パルムの僧院

・埼

ヒマラヤのテントに毎夜久弥氏の『パルムの僧院』読み過ごしとふ  
ならばとて傘寿の吾も図書館に借り出して來ぬ『パルムの僧院』  
『パルムの僧院』読み進む中に花の名の「ほひあらせいとう」辞書に当たるも  
鳥の名に鷗鵠といふのも出できたり初めて知りし鳥の名にてあり  
一読をしてみたものの「伊と仏」の地理と歴史のなれば苦し  
炎天もまた楽しむや菅笠の男が照りつく中山道をゆく  
最上川豪雨に氾濫するまでに暴るる川となりにけるかも

## 山下雅子

八月十五日

・習

八月の六日九日十五日今年も折るいのちのありて  
戦争は終り空襲はもうないと叫びし十五歳の暑き夏の日  
今夜から灯火管制なしという思わず防空頭巾を空へ  
征きしまま音信不通なる父はいすこにいかにただ無事なれど  
あきらかに敗戦記念日なる今日を終戦と称え七十五年  
さくさくり米をときつ豊かなり戦時と絶えしこの当たり前  
米をとぐ手触り音をいとおしむ無洗米は使わぬだろ

大雨に半ドン告ぐる放送す校内に湧く生徒の歎声  
「行進」に道を譲ると書きし子は手足を大きく振りて主張す  
「先生はポジティブですね」「六十年生きていればね君もそうなる」  
生徒らの声をどれほど拾えたか授業を終えてうつむき歩く  
静かなる子ほどテストの点高しにぎやかな子よ君も愛しい  
前髪を垂らし表情の見えぬ子の無言のうなずきに意思を汲みとる  
空席を不思議と思わずその席に座りいし子を日に忘れゆく

## 八乙女由朗

・柴

長雨の後を焼きたる日の照りに虫らいで来ず秋來たるなり  
暑をよけて無為に過ごす日多けれどすべ浅くして歌深まらず  
自動車免許止むはわがわざ捨つるなり越えゆかん生るる衝動いくつ  
旧漢字、旧かなに学び新漢字、新かなは自学におぼえて候  
終戦は七十五年前なれど学成らずして乱世に紛れぬ  
分校同期の男子五人を先送り居残りせんかこの野風僧  
あの峯が磐城・陸前の国境燃え落ちんとす赤き半月

山野幸司

南瓜

・沖

朝井恭子

国民学校

・森

草かけにカボチャの蔓が手を伸ばす今日の光をしっかと摑む  
草かけのカボチャは緑ボックリと宙に揺れおり猛暑の中に  
栗平と名付けられたるカボチャ君夏草の中味濃くする

不耕起の二百坪畑荒草のばっくりと夏カボチャ飲み込む  
草を刈る機械をなだめ荒畑の端より一步大地踏み縮む  
嵐吹く田んぼの畦にひょうひょうとアオサギの見る畠の花咲く  
ゆくりなくアオサギ田んぼ畦に立つわれのトラック仰き飛び立つ

横田敏子 悲しみの夏

・福

磯田ひさ子 聽く

・森

コロナ禍に娘らの帰らぬ盆となる 般若心経心して唱う  
亡き母のわれ呼ぶ声か幻か午後の座椅子にまどろみおれば  
暑さうすれカーテン引けばひんがしの空通りゆく銀翼光る  
陽の温み籠る草むら蟋蟀の命つなぐと一途なる声  
去年に兄盆にその息子を送りたり悲しみ深き夏逝かんとす  
十歳のサッカー少年遺されて母を氣遣い涙を見せず  
台風10号みちのく避けて通り過ぎ猛暑の夏は峠を越しぬ

吉永惟昭 長月

・熊

市原志郎 小犬

・萬

補（こうほ）は医者の所見を聴きゐたり耳といふ耳窓にそばだて  
自らのやまひにあらずかたはらの人のやまひにただに青ざむ  
一般論と医者は言ひつつ直截に残りのいのちのことに触れて  
夜を醒めて医者の言葉を探りをりまこと正しく聴くは難しよ  
はるばると來たる思ひの浅草寺に病気平癒のお守りを受く  
夫のやまひ告げられし後こととく日々のくらしの意味を持ち来る  
暑き暑き八月なかば秋すすきそよぐと北の友のたよりに

菊月は残暑厳しき夏枯れに山河在りきを意識さす秋  
負けいくさ忘れかねつる復員に交じる白衣の目に痛かりしを  
敗戦を肌に感じた九月より戻りし学窓焼跡なりき  
丸太運び建てしブラック校舎にはなべて飢えいし学徒が集う  
変遷や七十五年 鮑食の世に生きて居りコロナに怯えて  
やがて来る冬は思わず豊かなる稔りのみ恋う彼岸が近い  
台風は北上中なり天も身も不安定なる今日遅空忌

あの世より使いの如くに黒揚羽一羽庭を横切りて行く  
ぶれていない話する政治家已れ売り込む演技見ている  
夏の夜に寒さ覚えて目覚めたる夜更けに小さく喰りいるクーラー  
同じ話題を流すテレビあちこちのチャンネル廻し溜息をつく  
クラスターと言う今まで聞いた事のない言葉毎日聞いているテレビにて  
モッコウバラ伸び始めたる生垣に沿いて飛び行く黒揚羽一羽  
真白き小犬にマロと名を付けて抱き来る末の孫の愛らし

# 市原やよひ

街路樹

・萬

# 小野雅子

晩夏

・羊

百日紅花の盛りを切られ行く街路樹は今し瘦せ衰えて  
早ばやと花の盛りを切られたる百日紅の並木通りよ

鳥影と紛う大き揚羽唐突に現る弟の忌に

弟の化身か黒き揚羽蝶しばし留まる我の前にて

集うこと叶わぬ老齢四姉妹弟の忌を電話にて偲ぶ

姿なき禪鳴きつのる大けやき古き酒屋の庭に立ちたり

ポスト前急に降り出す蟬の声夏の終わりを告げいるよう

# 大浪美雪

ようやく

・森

# 神田鈴子

黙祷

八月六日八時十五分黙祷す七十五年の歳月重し

一瞬に破壊されたる広島の灰色の街いまも浮かび来

唯一の被爆国なる証とし原爆ドームはなほ立ち尽くす

今年また心引き締むる慰靈祭つどへる人は老い深めゆく

七十五年の時は流れ被爆者の次つぎこの世を去りゆく今は

核廃絶かすみたる世に新型のウイルス人をむしばみてゆく

安倍首相の辞任会見一時間水なく椅子なく病む身を立たず

# 奥田陽子

ショベルカー

・羊

# 菊地栄子

草原

・湾

その首を川面に垂れて停まりいるショベルカー赤し雨の休日

土蘿積む作業半ばに休みいるショベルカーなり雨とど降り

白波の洗える川のどしゃ降りを見おろしている赤きショベルカー

思い出したように鳴き出す蟬の声午後もくもれるままの空あり

絶対に折れまいとする意思のことニッコウキスゲ鋼の茎をもつ

今日初めて蟬を捕ったの女童の声張りもちて盛夏越えゆく  
きらきらと弾ける水の勢いもて駆け来しからだ堅く縮まれり

散歩する舗道の濡れのまちまちに洗い去りゆく夕方の雨  
前任者の目線で物言うは健気さか新任者われぶつ壊したき  
二度三度聞き返し居る遠電話衰えは来ぬ諾いがたく  
梅雨に濡れたたずむ樹木はみながらに色なき花の極まりてゆく  
あちらこちら咲き遅れたる山百合を抱き聳える赤松の丘  
花の水換えんとするに飛び出しき踰いもせぬコバエ一匹  
降る雨を物ともせずに寄り添える鶴は青き草原を食む

# 木村文子

雨に眠る

・羊

# 河野繁子

握り鉄

・雁

星のない夜空に町は身をさらし雨を待つ砂漠のように  
遠雷は猫のことくにころごると 部屋の空気が厚みをましぬ  
ビロードの霖雨のなか喧嘩も熱もさめゆく真夏の町は  
雨粒が地を打つ音の激しさに目覚める肌に粟たてながら  
あちこちで窓を閉める音がする夜明けまでにはまだ少しある  
くたびれたタオルケットにくるまりてざんざんと降る雨に眠りぬ  
雨の日は狩りはお休み猫族はアンモナイトの眠りを眠る

# 草刈十郎

風鈴

・世

ベランダの風鈴ひとつ機嫌よくいと涼やかに鳴りひびきをり  
蟻ひとつわが膝の上歩きをりわれの身体を旅路としてか  
身も溶けるやうな炎天下日傘にていのちふたつの妊婦ゆくなり  
おたがひに会釈交はしし人はだれ帰り着きても思ひ出せざり  
玉碎とふ言葉の意味を知らぬ人戦争の無惨を知りてほしかり  
コロナ禍の感染数を日々見つつ想ひさまざま秋を待つなり  
わが人生一万メートルあと一周のゴング聞きたる心地する朝

# 国井節子

子に従ふ

・春

寒風に曝せる細き三輪さうめん真夏の喉をさらさら滑る

朝夕に撒く水の量ただならず偶には天よ降つてくれぬか

中年の恩恵がわれに物申す「頼むからもう車はやめて!」

大丈夫!私は無事故無違反よ、されど老いては子に従ふから

鮮明に思ひ出しをり去年の夏、娘の部屋に見し墨田の花火

絶好のチャンスを惜しくも逃したる安倍さんの胸中思へば無念

日本丸、どこに向かつて漕ぎゆくや縦理の椅子に坐るのは誰

# 近藤栄昭

ニュース

・虹

二部授業始まり九月子どもらも大人びて先生の安否気づかふ  
広島より帰還せざりし先生よ「再た会へるから」の言葉を遺し  
柏尾川堤の桜樹につきつぎに切られ給食の薪となりぬ  
清新しき鞄と教科書ひろげ見せ朗らかに転校告げたる英淑  
焼け跡に電線を張る男らの話は露店の土産物人気  
米に換へる着物惜しまねど人形を進駐軍に売らじと母は  
除隊して尋ねたづね来し人あれば薪をあつめ風呂を焚く父

# 小林能子

九月(昭和二十年)

・羊

手にやさし握り鉄に母の名と同じ綱代の刻印ありぬ  
購入の記憶なけれど切れ味のすぐれて相性密のつきあい  
反抗期を論すもなくて病床にありたる母をまた思い出す  
耳とおき因をなせるは片耳に二〇〇〇ヘルツの音捕れぬらし  
二〇〇〇ヘルツの音失えば「さしすせそ」捉え難しと生きねばならず  
月一度レストハウス花かごに運ぶパソコン難題もちて  
気みじかの我の打つキ一幾重にも纏れて困るはパソコンの方

近藤芳仙 ヴェネツィア

・信

佐久間景

日乘(三八)

・湾

船かよふ運河の水辺朝遅きテーブルにのむ熱きエスプレッソ  
運河の水すべるがにゆく水上バスゆれにゆだねる心地よさあり  
吹子ふくガラス職人島にて生み出す瑠璃をひからせてをり  
あくがれのカフェローリアンに生演奏ルバフェの甘味舌にやさしい  
裁かるるために罪ひとゆきし橋「溜息の橋」運河にちさし  
ゴンドラにカンツォーネ聽く夕べには運河の水面きらきらひかる  
夕食は魚市場のレストラン隣のマダムもロブスター食む

坂上直美 伊太利紀行

・天

佐藤道子 やさしき人

・甲

ひんがしの山脈越えて雲浮かぶあまねく夏は輝き渡る

彼方には輝く夏の雲ありて「なぜ旅に出ぬ?」と問いかくれども  
暗き眼のノマドのおみな我を見き羅馬の街の石畳の上

シエナとう城砦都市あり竜の街蠣牛の街のその中にあり  
ヴェネツィアの運河を過ぎて海に出す両手を広げ潮風を受く

三度ここに來ることありや若き日に硬貨を投げしトレヴィの泉  
行かまし遠き外つ国世の風しすまりしなら空を仰ぎつ

坂出裕子 桔梗

・洛

鈴木結志 曜麥天目

・福

元栓を消して眺むる夜の空 飛行機の飛ぶことのなくなり  
耳も目も口もふさがれるやうなコロナの日日のただに疲る  
マスクしてコロナの日日を耐ふる子が聞かせてくれる音読のこゑ

誰からも離れてとぼく暮らしてコロナの空に浮かぶ満月  
短歌のあることのしあはせコロナの日ひとり三十一文字をつぶやく

外つ國へ行くこともはやならむかテレビに映る世界のとほき  
炎熱の屋の庭辺にそよぎをり薄紫の桔梗のつぼみ

伸べられし手に縋りては立ち上がるこの哀れさは思うだに無く  
誰彼の美しき心に縋りては今日も生きてる三つ児のさまに  
午前三時般若心経唱えては今日が始まる何のことなく  
この頃は米世に繋ぐ手筈とも心経唱え一日が明ける  
そう言えば今月はわれの生まれ月九十五歳になつたのか嗚呼  
おーい三好よ足立よ山村も今頃は呑氣に何をしてるや  
生きることなど思うこと無く生きているこの現実は何なるものや  
足葵えの犬と一緒に散歩するやさしき人と林間に会ふ  
手押し車に足葵えの犬寝そべりて撫でればさらさら毛並美し  
マスクせねば白い目で見る風潮は我が民族のさみしき氣風か  
同調の風土は戦につっぱる我が民族と識者は恐る  
この星にコロナがあふれてゐる様なマスクの話にテレビを消しぬ  
恐い恐いと人との繋がり断つことを煽るテレビの更に恐ろし  
世界ではコロナは嘘と言ふ國も出で来て我等も思案しどころ  
留学僧持ち来し天目茶碗とう禅宗に伝わり國宝となる  
しろがねのまだら文様睦み合う曜麥天目陶工の技  
陶工の理学曜麥天目の宇宙の神秘碗にあふるる  
漆黒の釉の表面オーロラを醸す秘め技曜麥天目  
科学者も茶人墨客目を凝らす曜麥天目たれぞ謎解く  
仏教と茶の湯をつなぐかけ橋か曜麥天目美の象徴ぞ  
曜麥天目ミクロレベルに見る画像宇宙生命の神秘を醸す

関根榮子 炎暑

・埼

窓覆う茂りになるも苦瓜の雄花の多し散るばかりなり  
触れて来し幸もありしよ帰り来て入念に手を洗うということ  
蔭のなき道急ぎおりこの先に一里塚あり杉の木のある  
朝な朝な鳴きいし山鳩もふつりと消えて暑さのいよよ極まる  
陸橋を上りて行けば見ゆる富士蜃氣楼のごとく炎暑にゆらぐ  
耕作を放棄の畑のまた増えて荒草の囲む徑となりたり  
誰に会う誰にも会わずとりあえず日も落ちてきてコンビニへ行く

関根和美

証

・埼

『ばれん山』著す縁にもとめたる茂吉の『つゆじも』書棚に探す  
百年前茂吉も憚りし「はやりかぜ」確かめんと繙く歌集『つゆじも』

大正九年一月六日長崎にて茂吉はスペイン風邪に臥りぬ  
ひと月をこえて臥りし長崎の茂吉の詠むものいまに新し

五ヶ月ののちの喀血この年の茂吉はなべて療養に過ぐ

晶子また茂吉も想定外なるや再読の理由うたの役割

二〇二〇・令和二年に荷いたるコロナ禍の詠草証とならん

高尾恭子

夏籠もり

・大

終活は源氏も為しき心処に封じて手紙をひと束やぶる

嵩たかきアルバム繰ればダッコちゃんを腕に巻く児の前歯欠けいる

パソコンを抱えて部屋にひきこもる夫と糸電話のやりとりしつ  
パパママ滑舌練習くりかえしパパになつてもパパになれず  
草いきれむとたちくる風の道シオカラトンボを道連れにして

見え隠れしつつ女子消えゆきぬ一万株の向日葵の蹤

寝て起きてからだの芯が削られて忘れた頃のつくづく法師

高津砂千子

オリオン座

・風

屋上のめぐりにひらくひまわりの大輪いきいき老人ホーム  
きんきんの夏日のもとを散歩する犬はだらりと舌を垂らして  
宵の口雷鳴とどろく小半時やがて土砂降り熱のにおいす  
處暑過ぐるも猛暑居座る日日にして百日紅のみゆうらりゆらり  
暁暗の空をいろいろオリオン座ウォーキングの友となりたる  
おつとつと転びかけたり青アザの鮮やかなるが油断のしるし  
足の指ていねいに採み爪を切る葉月のおわりを告ぐ人のなく

滝田靖子

夏

・新

灼熱の矢が突き刺さる炎天のバス停いささか命がけの夏

電柱の陰に身を寄せバスを待つスナイパーから逃れるやうに

眼裏に雨降り続く八月の庭に真つ赤な薔薇の花咲く

過ぎ行ける風は狂気の手を広げ残酷な夏の記憶かき混ぜる

雷鳴のまだ少し遠い夕暮れの庭にきて鳴け名残の蝉よ

窓も戸も口も心も閉ぢてゐるよ本当の夏など知らなくていい

捨て去つていくのか擲つしていくのか溜息ばかりの夏もう終はる

竹下妙子

証し

・霧

散り敷ける桜の枯葉の舞ひまふは春に芽吹かむ証しなりしか

幾年を生きつきて來し桜木の熱砂浴びしも生死は常なる

熱風の荒びて過ぎし篁に折り重なりて竹らは枯るる

かぎりなきこぼろきの声聞こえきてひとりの夕餉淋しからざる

秋雨くればかなかなの声ひそめけり山の夕べの重たさの中

秋雨の去ればかなかな鳴き出でぬ真澄の秋の空のことしも  
あをじろく秋の色こそ流れゆく霧おく里の山川の上に

## 田 土 成 彦

雷 雨

・ 宙

## 虎 谷 信 子

お 盆

・ 伴

怨念はあるやも知れずマッチの火消えて指先の残像しばし  
 土星の輪が裸眼で見ゆる草原の人らよ今でも見えていますか  
 梅雨明けのうんざりするほど青い空にUFO飛んできはくれぬか  
 カタコンベほどに空氣の濁みゐる地下駅まで八十段くだり来て着く  
 賞味期限あと二日ほどあたふたと作るたまご焼きゆで卵など  
 ほころびも破れもしないTシャツの十年目となるを取り出して着る  
 安全な場所にゐて雷雨やり過こす猛暑日二十五日つづく夕方

## 田 土 才 惠

テレプレイ

・ 宙

テレプレイやってみましたコロナ禍に籠もりて歌う独り厳しく  
 人知れずコロナ禍の日を籠もり居にテレプレイすれば湧きたつ思い  
 それぞれに歌う十五名コロナ禍の最中にテレプレイ編集されて  
 YouTubeに見るテレプレイわが姿のおぼつかなさも垣間見えて  
 手作りの水羊羹も頃合いの甘さに馴染めば暑さを凌ぐ  
 産直の店に天ぶら蕎麦を食ぶ南瓜の黄の花百合の白花  
 夫の背丈こえてこの夏なお伸びる男孫と過こすことへの不思議

## 玉 井 綾 子

カブトムシ

・ 羊

腐葉土の素と枯葉を添えられて貯い受くカブトムシの天命  
 透明な虫かご・カブトムシゼリーのリスクなき衛生的飼育

虫かごで幼虫なき成虫となるカブトムシの全世界観

カブトムシ秋冬春をたくわえて夏の太陽に目覚め鳴きおり

幾万年を腕立て伏せのカブトムシ背筋凝りて鉄色に照る

オス同士争う音に起きる夜カブトムシのケースに湯気の立つ  
 カブトムシを怖がる男児が牛・豚を屠りて食すゲームにあれば

## 中 島 央 子

七十五年目

・ 森

菩提寺より線香一本、灯ともして、仏間に迎へ 盂蘭盆に入る  
 盆三日 お精霊さんへのお給仕よ。少し手抜きをお許し下され  
 久びさに岐阜ちやうちんのほの明り。盆の夕べは 心はづめる  
 お精霊の 古き塔婆のおたきあげ。読経の声の たかまりて終る  
 風とほる板の間に 座し井戸まつる。藪の上なる 供物のいろどり  
 紅型の額かけかへて もろもろの絆よろばふ 部屋に座を占む  
 紅型の朱を思へり。刻こくに うつろひてゆく 夕映えの朱

## 中 島 義 雄

遠ひぐらし

・ 岡

みんなんの啼けば収穫まで三七日と教へし祖母を懷ふ庭先  
 天涯にも秋は立たむか蜩のこゑを寂しと言ひたる妻  
 かなかなの落ち蟬ひとつ地に埋めて少年の日の母を恋ほしむ  
 蟻地獄に落ちたる蟻を掬ひあげ美しき嘘を纏めをりたり  
 くちばしを埋めて眼らむ鳥を懷ふ新しきマスク顔に当てつつ  
 草陰を出でて続ける蟻の列いつこ行くともコロナの熱砂  
 蟻蟻のこぼろこぼろと鳴きそめて遠病む君の便り来たらず

永塚節子 沼津

銀

ぱぱりょうこ

溜飲を下げる

鹿

沼津市にゆかりの芹沢光治良記念館に足跡たどる

若き日に読みたるままに訪うことの機会なかりし記念館なり  
コンクリート打ちっぱなしの記念館どこかフランスの香りを纏う

「時折は」主治医の言葉思い出し握り十貫舌づみ打つ

鮎のねたに初めての魚三つあり胡椒鯛に鮎と鮎鰈

牧水の記念館は純和風垣をめぐらし蹲踞を置く

篠竹の垣根越しに聞こえくる松を吹く風潮の遠鳴り

萩葉子 つり橋

銀

浜谷久子 星

地

富士釜も更好棚も何故か好き玄々斎の好みと知ればなお

われのみの呼び名がありぬ花や鳥の庭にきていた鳥の名もひとつ  
「世界一美しい村」との案内図あれは村人の一存だったか

身に近きはふたりの子のみ 淋しいときは兄に電話する  
ひとりずつ渡りしつり橋あれば何処友も私も思い出せない

青白いシオカラトンボと目があいぬいつから並んでいたのだろう  
緑道の草が私の背をこえた 夏の終りが近づいている

白子れい 庭の花々

洛

浜本芙美 竹の秋

夢

梅雨あけを待ちていたるかジイジイと初蟬の声今朝の頭上に

石堀の内側にしかとすがりつく蟬の抜け殻雨にも負けず

予定表の式典・茶会・短歌の会・クラブ活動コロナに中止

コロナ避け熱中症さけこもりいて語る相手は庭の花々

白木槿・芙蓉のピンク・赤百日紅・金水引の黄庭はとりどり

朝に掃き屋にはけども百日紅の花は散りお入り口にまで  
生かされて九十三年の日々ふりかえる学びに恋に散らしし火花

鉢植えの枯葉の前に佇みぬ竹の秋竹の秋とつぶやきながら  
同年輩の人があちらへゆきたりしよき笑みのみを吾にのこして  
世界中がおかしくなった新コロナ 花ほとときす今年も咲きぬ  
同じことくり返し言う友のことわれの行く先とああうとめざり  
われらの二人に残されている歳月をかみしめながらまた腹立たし  
ハイビスカスの一輪が美しく咲きし日に最愛の弟ああ逝きたりし  
部屋の雨戸一寸明ければ今日の光さし入りわれの朝の来た

ひとりごち すり泣き はた さめざめと ついには暴発 梅雨の末期の  
手作りの紙雛の顔ふたりとも拗ねて見ゆるなりとしゃぶりの夜  
かわための海辺にひとりひそと佇つ夢からさめしばしゆらぎぬ  
幼な顔いまだ残せる女と逢う約束のでんわ水無月の声  
りようこと 片や かわりと呼び合える長き闘わり ケンカ友達  
病いにはかかわりなきを並べたて裡なるとのへ溜飲を下げる  
他愛もなき言葉つらねてさんざめきのちの淋しさ言うべきもなし

檜垣美保子

炎天

・昇

藤森巳行

夏休み

・銀

ひとつ咲き六日つづけて咲かぬまま空にむかい今朝花ひらく  
 炎天下ひと来り燃ゆる赤き文字「ハッピードリーム定期」のチラシ  
 開け放つ東の窓の夏雲にコーヒー豆の焙煎のけむり  
 行く人を見渡す位置のレブリカの「考える人」立たざるままに  
 黒き傘失くしたる日のゆうぐれに漆黒の尾羽たれの置きしや  
 六畳にヒトスジシマカ打ち損ねラップ飲みする真夜中の水  
 焼き鯉の身の反りを白き皿に置きしばし眺めて酒は辛口

福田庸子

岩煙草

・今

夏の朝岩のしづりに身を清め結果に咲く岩煙草群

岩しづくしたる間に光寄せ袈裟の色して岩煙草咲く  
 日輪のやうやくかける刻待つと鶴次<sup>ツバメ</sup>つきと水浴びゆけり  
 夕されば土鉢の水を羽ぶるひにはげしく散らすひよどりのかげ  
 地球上人の営み途絶ゆるもコロナ禍のもと猛る草木は  
 樹をめぐりしみくる声の届く宵怪しく増ゆる今夏の蟬は  
 風の届く床に聞きゆく今生のつくつく法師は四方貫けり

藤田美智子

別れ

・新

久我田鶴子

アジェ

・羊

鳥まだ目覚めぬうちの午前二時われを導きくれしひと逝く  
 重い荷物も苦にせず担ぎし肩の薄くなりたり布団より出づ  
 「葬式も墓も私にはいりません」結びたる口がきつぱりと言ふ  
 看取られず旅立ちゆけり大股に歩みゆく後ろ姿が見える  
 後輩のわれにもつねに敬語なりき思想をもてる人の強さに  
 静安室に最後の別れを告げてきて熱気を返す地を踏みたり  
 会ふことのかなはぬままの別れなり逝きて七日の夢に手を振る

夏休み勝手に決めて一週間ただ起きて食べ飲んで寝にけり  
 コロナ禍で無為に過ごした日日なりき寝てゐるだけでも人は疲れる  
 コロナ禍で帰郷の出来ぬ今年の夏墓参りせぬ我を父母許せ  
 テレワーク関係のない我が家なり無職の我に教師の長男  
 テレワークしてみたかった五十年前通勤ラッシュに耐へずに済んだ  
 コロナ禍も猛暑も耐へて強かに生きてゆきたい雑草の如くに  
 この暑さ何處にも行けず寝て過ごすいい歌なんかできるはずねえ

船田清子

酷暑

・天

立秋を境にピタリ蝉鳴かずいづこに持つや体内センサー

コロナ?はた熱中症か朝夕を救急車の音次々せはし

三十九度にならむ熱気に救急車真昼音なくクーラー音のみ  
 真昼間をクーラーもつひにボケたるや設定温度まで下がり切れず  
 シルバーカー片手に押さねば放水もままならぬ不便 沈丁花枯死  
 デュランタのまとふ紫の風もなくあはれ花なく葉も枯れ縮む  
 一時の雷雨の後の夕焼けは七十五年前の大坂の空

映り込みを計算せしや構へたるカメラに街が反せる光

アジェは撮る記録に徹することく撮り己が姿もそつと残せり  
 危機的な日々を生きるに鈍くなりまた手をやりぬ目にも口にも  
 数値化を拒むと言へるほどならねケータイ・スマホいまだ持たぬは  
 看取るまでは頑張るよと言ふこの夏のおとうとのこゑ母を語りて  
 娘ふたり成人させたるおとうとに烟仕事が身についてをり  
 ときどきをカメラ構へる人になる弟にしてなほカメラマン

## 花つれづれ

### 柄目けい子

「詩仙堂」の思い

詩仙堂さながらの庭に芙蓉の花うすべに染まる時のうつろい

桔梗の名をあさがほと言うは万葉名なりと令和二年の葉月に覚ゆ

山百合の咲ける白さよ誰がために告げたき事のありし姿に

月桂樹ローリエを小雨降る中剪定すそこはかとなき香に酔いながら

季節はずれのクレマチス見る蔓の先猛暑耐えたる誇りを凜とす

草を引けばベルガモットの葉の放つ香り飛びたり八月の朝

朱きバラ一輪やよし虫害にひとたび捨てし鉢に開きて

ふる里の裏山埋むる山百合に父母の魂あり莊嚴に咲く

ひとつ又ひとつガーベラはお礼肥に健気に咲きて愛しも

折々に言の葉綴り歌詠むは小さなため息想い吐くため

きらきらと照り返したり白き花日向雨に濡れ群らがる十葉

八月の陽に桃の実かがよい見はるかす一山こぞりて桃香にむせぶ

一面の青田に添いてカンナ咲く水害にめげず救世主なり

「啄木会に入つてよ」という友からの連絡。啄木忌にその総会があり、そこに初にお目にかかる八乙女由朗先生もおられ地中海へ入会させて頂きました。御多忙の中、指導して頂き感謝致しております。

私は八人兄弟の末娘。虚弱体质の私を父は拓いた果樹園の山径を連れ歩き、快い風鳥の声、湧き水の音など忘れ得ません。父は、私に習い事をさせてもらいました。習字は生涯のものとなり、古文にも触れた。高三の担任（古文）から看護学校を勧められ、JR大阪病院看守で三年間学んだ。医大生とのサークルで京都の「詩仙堂」を度々訪れ、ひきつけられた。悩める時は一人で訪れた。天王寺図書館も近く、恵まれた環境にあった。

その後、JR仙台病院に勤務するも六年後結婚を機に東京のJR中央病院健康管理部で日勤のみの仕事をし、十年後夫の転勤で船岡へもどり、海や山に近いこの家にハブを育て鉢花をいろいろに。東南角地よろしく、ラベンダーは一坪程に。月日の経つのは早く、地震や台風の被害も少ないと土地で良かったと思います。隣町で生まれ育ったので知人も多く励まし合っています。

## 夏茶碗

中江 京子

ふる里のたたずまい

まつたりと茶の湯の文化根付く町匠の和菓子城下に残る  
独り居の母の好める夏茶碗手触りやさし祖父の声する

茶席もある松江城下の菊花展爽やかな秋を父旅立ちぬ

父が逝き時刻まれて十余年芹の香漂うなぜか今宵は

出雲路に母の好める湯宿あり小さき背中湯けむりに震む

春びより宍道湖畔の喫茶店母と分け合うミックスピザを

亡き父の名刺一枚挟まれて温もり残る厚き郷土誌

元旦に万五郎なる鍋囲む晦日の夜なべ里芋蒸して

「だんだん」は出雲言葉で「ありがとう」いつまで残るやふる里遺産

雨の音いや蟬の声早晩の初夏の兆しに耳を澄ましぬ

梅仕事いつものように手際よく進める厨に梅の香満ちる

湖辺<sup>うなべ</sup>から見上げる花火むかえ盆あの日の孫は薄黄の浴衣

夫が退職後は田舎暮らしをしたい、とい  
う希望もあり、私の母のいる郷里、島根県  
松江と大阪を行き来する生活を続けていま  
す。コロナ禍の影響で今年はまだ一度も行  
けていませんが、目を瞑れば宍道湖と日本  
海のやさしい風景が浮かんできます。

ふる里のたたずまいを見る度、歌心の全  
くなかつ私のなかにこの景色を言葉に残  
したいという気持ちが沸いてきたように思  
います。そんな折、田土ご夫妻とご縁が繋  
がり地中海へ入会させていただく事になり  
ました。

歌の心得など全くなかった私ですが夫の  
「やつてみたら」の言葉に背中をおされ、  
また友人の勧めもあり、厚かましくもあた  
ふたしながら歌作りに励んでいます。多く  
の先輩方の歌を聴ませていただき、その表  
現力の巧みさ語彙の豊富さに驚き圧倒され  
る毎日ですが、自分なりに素直な歌が詠め  
たら、日々の些細な事柄を見逃さず心にと  
どめることができます。多くの方々の御陰で歌を作らせていただ  
いていることを肝に銘じこれからも地道に  
氣長に楽しんで行きたいと思っています。  
このような晴れの機会を得られたことを  
とても嬉しく思っています。

## ◆今月の二人・柄目けい子作品評◆

## 香り飛びたり八月の朝

柄目さんは、宮城県の柴田町船岡在住。大阪の看護学校で学んでいた頃に訪れて以来、詩仙堂は心惹かれる所だと言う。

・詩仙堂さながらの庭に芙蓉の花うすべに染まる時のうつろい

仙台、東京の病院勤務を経て、現在の船岡に。庭の花々を楽しみながら、時に思いは京都の詩仙堂に向かう。その庭も「詩仙堂さながら」だといふ。芙蓉の花に見ている時の移ろいは、季節を超えて遠き日にも通つてゐるようだ。

・月桂樹を小雨降る中剪定すそこはかとなき香に醉いながら小雨降る中の剪定作業。月桂樹は湿った空氣の中に良き香りを放ち、雨の中の作業も捗つたことだろう。

・草を引けばベルガモットの葉の放つ香り飛びたり八月の朝 夏の朝の草取りも、ベルガモットの香りと共にある。爽やかなハーブの香りが「飛びたり」という勢い。元気が出る。

・ふる里の裏山埋むる山百合に父母の魂あり莊嚴に咲く生まれ育った家の裏山を埋める山百合の花。そこに作者は、父母の魂を見ている。山百合と父母とをつなぐ特別の思い出でもあったのだろうか。「莊嚴」は花の咲くさまを言いながら、亡き父母への想いを思わせる。

・折々の言の葉繕り歌詠むは小さなため息想い吐くため

言葉を綴り、歌を詠むことは、柄目さんにとって小さなため息であり、折々の想いを吐くことだといふ。短歌はささやかなものかもしれないが、それによって支えられている日々の暮らしがあること。「私も」という共感の声が聞こえてきそうだ。

## ◆今月の二人・中江京子作品評◆

## 早晚の初夏の兆し

評者・久我田鶴子

中江さんは、大阪府箕面市在住。郷里は島根県の松江。母上のある郷里と大阪との往き来を続けてゐるという。

・まつたりと茶の湯の文化根付く町匠の和菓子城下に残る松江と言えば不味公、茶の湯の文化が根付いている町である。茶の湯に欠かせない和菓子の老舗も何軒も。作者の故郷自慢は、淡々としていて搖るがない。

・独り居の母の好める夏茶碗手触りやさし祖父の声する。独り暮らしになつてゐる母上にも茶の湯の文化はしっかりと根付いていて、夏には季節の夏茶碗でお茶を点てくれる。手にした茶碗のやさしい手触りに、思い出されるのは祖父の声。祖父から母に譲られた夏茶碗であったか。

・亡き父の名刺一枚挟まれて温もり残る厚き郷土誌

厚い郷土誌を手にとつてみると、そこに挟まれていた父の名刺。父が読んだ痕跡とも、母が今も捨てずに代わりに使つている父の名刺とも読める一首。いずれにしても、作者にとっては懐かしく、温もりの感じられるものだったことだろう。

・雨の音いや蟬の声早晚の初夏の兆しに耳を澄ましぬ  
雨の音? いやそうじゃない、蟬の声だ。この言い直しに、明け方に耳を澄ましている様子が生き生きと伝わってくる。

・「初夏の兆し」に耳を澄ましたという表現も光っている。  
湖辺から見上げる花火むかえ盆あ日の孫は薄黄の浴衣 宍道湖の湖畔から見上げた迎え盆の花火。「あの日」とは何時のことだろう。今年はたぶんコロナ禍のために見られなかつた花火。孫の浴衣姿とともに「あの日」がよみがえる。

私は、昭和四十六年四月に母校の京都府立洛東高等学校の養護教諭として転勤してきた。

その前年だろうか、当時、教諭として在籍しておられた故山村金三郎氏、白子れい氏が中心となってPTA活動の一つとしての短歌指導が始まり、ここに、故山村金三郎氏をグループ長とする地中海の洛東グループが発足し、後々白子れい氏がその後を継がれた。

しかし、私は子育ての最中で余裕はなく全く関心を持たないまま時は過ぎていった。

そんな中、昭和六十一年の暮れのある日、歌会に保健室を貸してほしいと白子れい氏に頼まれ保健室で歌会が開かれることになった。そして、白子氏曰く、「午後までに一首を作つて参加を」と。急な事で戸惑つていると「5・7・5・7・7」と言葉を並べたらいいんや」と。そこで慌てて作つたのが、直前に吉野を訪ねた折りの次の一首である。

・吉野びなの古代衣装にひかれつゝ紅葉の暮れる吉野路くだる  
その後間もなく「地中海」に入会した。昭和六十二年、四十八歳の時である。しかし、転勤もあり、殆ど歌会には参加できなしまま師の山村氏に毎月作品を提出し、添削、選歌のみをしていただくことが多かつた。そして、退職した後にはじっくり御指

導をとその時を楽しみに待っていた。やがてその日は来て喜んだのもつかの間、思ひもよらない師の急逝で叶わぬ事となってしまった。

一方ではその間に「歌作りを続けるのであれば広く学ばないと」との夫の助言があり、夫の歴史好きと相まって歴史をたどり歌枕をたどる旅が始まった。また、あるきつ

## 私と短歌との出会い

219

八田 暁美

かけもあり、地元の大学の通信課程で国文

学を学び始めた。  
この時期に再び新たな世界を学ぶことが新鮮で充実した時間が持てた。多くの本も読んだ。学んだ事が仕事においても、思わずから三十年以上が過ぎた。その間にはいろいろあったが、今、結社を超えての歌友に恵まれて、月に二つ三つの歌会に参加させてもらい、夫の介護に関わりながらも道の辺の小さな花に心を寄せて自由気ままに詠い続けている。

最後に、ご指導と人生の深化のきっかけを頂いた、故山村金三郎氏と洛東グループ長の白子れい氏にお礼申し上げます。

とする意欲に圧倒された。少しでも講義の聴きやすい席をと早くに来る人、北陸や東北から夜行列車で来て夜行列車で帰る人、ストレッチャーに寝たきりで講義を受ける青年、すでに専門分野では名の知れた人や、難病や終末医療に従事する医師や看護師が自分の専門分野の知識や技術だけでは対応の限界を感じて学ぼうとするなど、多くの出会いがあつた。これらの経験は、その後の生き方や歌作りの姿勢にも大きく影響する財産となつた。

## けだもの 獣 の吐息ひめつ

三好 聖三

高尾恭子歌集『裸足のステップ』は、一〇〇〇年から一〇二〇年の三七二首を載せている。「大阪点景」のように大都市の風景から立ち上げ個の生活範囲へ入っていくという設定が面白い。

・焼きたてのパンを抱えて闊歩する「おおきに毎度」の声ひ  
びく町

歌集冒頭の「大阪点景」の最初の一首。「おおきに毎度」が商人の街に相応しい一首。以後、大阪の街の模様が活写される。七首のようにハングル飛び交いてオモニは見なれぬ菜ひさぎいる

・くたびれた灯り漏れくる豆腐屋に朝の仕込みの湯気たちの  
ぼる

・高層のビルに変わった下町をチンチン電車が寝ぼけて走る  
・ゴシップの好きな親爺が夜逃げして公設市場の賑わい消ゆ

る

七首のようにはングルが飛び交い、高層のビルの下をチンチン電車が寝ぼけて走る、夜逃げした親爺がいるかと思えば、織田作之助の影がしんと座っていたり、献血の誘いをとばけて無視する作者が居る。著者の座右の銘であるという「和して同ぜ

ず」の展開、大阪は破壊と創造を繰り返し、絶えず変化する、未完の街である。本歌集に通底している方法のひとつは、会話体、俗語、オノマトペを使用して、くだけた、かるやかな言い回しがとてもうまくできている。下の句から上の句への切り返しがとてもうまく歌に変化をついている。異化のように。ここでは、「チンチン電車が寝ぼけて走る」がそうである。

既に退職されているが、著者は、高校の教師であった。始業時、出席者が半分も居ないような、質問が詰問になるような、紙飛行機を飛ばすように軽く退学届を提出する女子生徒がいる。ようなクラスの担任も務めた。とはいえ、いや、だから、・母さんは死んだと平氣で嘘をつく少女の瞳に星ふたつ降るといふ女生徒の瞳にあらわれたわずかな（戸惑い）を見逃すことがなかった。

・だらしなく制服を着る少年がボクと呼ばれてはにかんでい

も同様だろう。

著者は多くの旅をしている。そのなかから四首。

・重衡の斬首はるけく茫々と木津の川辺に荻風ひかる  
・逆賊の小さき石塔まもりつき刃するどく水仙かおる

・「テンペスト」四巻読みおえ琉球のあした浜辺にわが骨洗う

・辺野古崎とおく見やれば夕迫る基地の灯りに目をそらすまじ

前二首は、「木津街道」から。南都焼討によって仏敵とされ、木津川の川辺で斬首された平重衡についての作品。張りつめた調べが良く、何度も読んでも良いと思う。ソフトとハードの融合、それがこの著者の歌の基盤なのだろうと感嘆する。

後二首は、「冬の美ら海」から、硬質で志操堅固の響きを秘めている。著者は、沖縄への関心が強く、再三訪れているようだ。先の戦争、日米地位協定下の基地の悲惨、民俗的な関心等、どこまで思考の垂鉛を下ろしてくれるのか楽しみだ。

両親について多くを詠っている。とりわけ、「二〇〇五年に亡くなった父のことは歌集に入れたい」と「あとがき」に記す。

- ・浅瀬けの柚子大根をたずさえて日に日に遅し母の棲む家
- ・足し算が引き算になる母の日々ひとすじ庭の白梅かおる
- ・底冷えの京の町家に蓬髪の母は流離の灯りをともす

となりの街の実家に独りで暮らす母がいる。あてもなく彷徨うように暮らしている。足し算をしているつもりが引き算になってしまう。(それでもなお母は毒を吐く。それは娘の来訪があればこそであり、娘への気遣いの裏返しではないか)ひとの手が必要になってきている母がいる。しかし、頻繁に帰ることもできず、遠く思いを馳せるしかないという、痛み(悲しみ)がある。

- ・復員の後を余生とながらえて父は末期のひと声あげき
- ・老人が老人ホームを慰問せりハモニカひとつ身に携えて
- ・父逝きて語りつかれぬ戦あり雨後の送り火ひとつじ点る

復員の後は余生であると語る父は、俺だけが生き残ったという想いがあったのではないか。見るものは見てしまった。身も心もズタズタにされた体験からハモニカを携えて老人ホームの慰問に出かけるということはありうることではなかろうか。人の役に立ちたいという想いがあるのかも知れない。遣された者は何をするか。先ず、父たちの戦争を知ることであり、その根を断ち切ることではなかろうか。

最後に、自己像について

- ・打たれても鋼になれず仰ぎ見る月は乱麻の鎌ほどに鋭き
- ・われをのみ照らすにあらぬ清月の白き刃に首洗いおり
- ・聖俗の境に立ちて歟の吐息ひめつつ手水をすくう
- ・人ひとり斬り捨てし夜きしきしと背骨抜けり寒の戻りに
- ・名も知らぬ汝の夜更けよ手擦れせし古書に烟草のにおいをのこす

前四首、撃たれても鋼になれぬこと、自己の拙さ、切ることは切られることであるという自覚が、清月の白き刃に首を洗わせる。しかも、歎の吐息を秘めながら。著者の意に反して鋼の四首である。五首目、古書を巡って、未知の人を遠望するという魅力。『論語』の「朋有り、遠方より来る。亦た樂しからずや。」を想起した。汝の夜更けは、我の夜更けであると。

「大阪のおばちゃん」と括られ気がつけばヒヨウ柄スカーフ一枚持てり」という歌がある。「あとがき」に「ありふれた一市民の生活を詠んだものばかり」と言う。「一市民」とはこうした「おばちゃん」を想起してのことだろうが、市民には啓蒙の臭いがして好きになれない。おばちゃんは、市民になったのだろうか?

## 現在を駆けゆく女

西堤 啓子

高尾恭子歌集『裸足のステップ』は二〇〇〇年から一〇一〇年までの歌を選び編まれた。二十代半ばで「地中海」に入会し

長く教職にあって多忙ななか歌を続けてこられ、定年後遭遇したコロナ禍にあって自分史の意味も込めこの二十年の歌をまとめられたとのこと、そこには誠実な生活者として、また伸びやかで自由な精神の持ち主としての高尾さんが息づいているようだ。

ルの増えてきた、いまだ成長し続ける街なのである。

- ・水饅頭つるりと食めば子を産みし遠き五月の朝すがすがし無事に母となり充足感に満たされた若き日をなまなまとした肉感を通して回想し、たくましくも潔い。

- ・うつむいた子の背を押すドラえもん耳かじられし傷がうずける

仕事と子育ての両立という懸命に生きた日々。親として時に氣をもむこともあつただろう。傷つき元気を失くした子の心を思ひ励ましたい気持ちを「ドラえもん」に託しせつない。

- ・夕風が子を取る子取ると吹きすさびぐらりと揺るる朱の一輪車

古来、民俗学的にも神隠しなど「子盜り」というのがあつたが、近年でも子どもの連れ去り事件が起つて寒心に堪えない。子育てのなか、一瞬そんな不安に捕らわれた親としての心情が「ぐらりと揺るる朱の一輪車」と象徴的に詠われ強く引きつけられる。

京洛中に生まれ、その後暮らすことになった大阪市。歌集のなかでさまざまなかたちで取り上げられているが、いずれも生き生きとした活力あふれるまさに大阪である。そしてそれは同時に本来京女であつたはずが、生活の中でいつしかすっかり大阪を愛し、そのパワーを自らと一体化させていったことを伝えている。そこは日常忙しく「闊歩」し、「見はるかす」高層ビ

・地下鉄の扉ひらけば定位置の女は昨日のつづきを眠る

・A4の勤務評価が飛んでゆく今年かぎりの春一番に  
・ぐつたりと紺のスーツは吊されてマリオネットの言葉をする

大阪府の教育現場では一〇〇四年ごろから教員の評価システムが導入され評価が給与に反映されるようになつた。その結果、およそ教育の場になじまない市場の競争原理が持ち込まれた状態が生じ、教員はいわば競わされ自律性や自発性はほとんど存在しない。そんななか何が本当に生徒の成長・発達に資するか、人間に教員自身が考える時間を奪われたまま心をすり減らしながら働くがざるを得ず、多忙化が進み「ブラック」とされて教員志望者は年々減っている。定年前の十年近くをこうした職場環境で過ごした自身が「地下鉄の扉ひらけば…」の「女」であり、定年はすなわち解放であったという「今年かぎりの春一番…」であり、「ぐつたりと」疲れきってスーツを脱ぐことで「マリオネット」の辱めから自由になつた、という今日の教育現場のリアルが巧みに詠われ感慨深い。

- ・思い出の冷めぬようにと真っ白な厚いカップに珈琲を飲む
- ・角砂糖二つミルクはたっぷりがよろし堺町イノダ珈琲
- ・すみれ色の父の記憶は順不同どうぞお好きなカードを引いて
- ・珈琲の豆を挽く音かりかりと記憶の底を香りたたしむ
- ・二〇〇五年に逝かれた父との思い出は実家近くの堺町イノダ珈琲とともににあるようだ。父と娘の強かった絆。「あとがき」にも今回歌集を編むにあたってどうしても父のことを入れたかつたとあり、今は失われたかけがえのない父娘の温かな時間が珈琲とともにあります。

琲が香り立つように詠まれ浮かんでくる。

・仕舞屋のべんがら格子はとうに消え積水ハウスに日射しが伸びる

古い京町家がいつのまにか取り壊されたあとにはモダンな「積水ハウス」が建っている。亡き父と暮らした娘時代は遠く流れ去りどんどん変わってゆく原風景。

定年後の高尾さんは、まさに水を得た魚のように点字図書室の音訳ボランティアなど活動の場を広げていった。四季折々の自然にも目を向け親しむ機会も増え、若々しいどこまでも前向きな元気な歌が生まれ続けている。

・蓮池の苔ふくらにつつみたり昨日のひかり一昨日の  
・前職はホテルマンとぞ声ふとく懺悔懺悔と松道ゆらす  
・倒されてまた甦る木の国森をさわだち羽かわす鳥

・約束は浜にのこして暮れにけり「海津大崎にさくら咲くころ」「蓮池の…」のような静謐かつ繊細な歌、熊野古道や琵琶湖

の旅を詠んだ歌など穏やかな時の訪れが感じられる。

・總足のようなパンプスぬきすてし女こそりて現在を駆けゆく

- ・沖縄は梅雨明けという爪赤く染めて裸足のステップを踏む
- ・「總足のようなパンプス…」とは、昨年まき起つた「KuToo運動」を指す。職場でのパンプス、ハイヒールの強制に多くの女性が抗議の声をあげ、女性だけが強いられる苦痛について社会の認識を喚起した。そして今、パンプスをぬいであらゆる束縛から自由になり軽やかに「裸足のステップ」を踏むのは高尾さんその人であつて、歌集名ともすることで今後の自身の生き方が高らかに宣言されているのだ。